

# 第14回「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム

## 開催結果概要

### 1 趣旨・目的

「京都議定書」誕生の地である京都において、世界で地球環境の保全に多大な貢献をされた方の功績を顕彰するとともに、京都から世界に向けて広く発信することにより、あらゆる国、地域、人々の地球環境問題の解決に向けた意志の共有と取組に資することを目指す。

### 2 日時

2023年11月18日（土）午後1時～午後5時

- |                           |            |
|---------------------------|------------|
| (1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式    | 午後1時～1時40分 |
| (2) 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム | 午後2時～5時    |

### 3 場所

国立京都国際会館・RoomA（京都市左京区岩倉大鷲町422）

### 4 内容

#### (1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式

##### ア オープニング・アトラクション



「KYOTO 地球環境の殿堂」を振り返る映像を放映しながら、京都市立堀川高等学校吹奏楽部のみなさんに演奏いただきました。

##### イ 表彰式

「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会の山極壽一会長より、第14回殿堂入り者に対して、認定書及び記念品を授与しました。



<第14回殿堂入り者>

ジル・クレマン氏（庭師、修景家、小説家）

中村桂子氏（JT生命誌研究館 名誉館長）

<授与者>

山極壽一会長（総合地球環境学研究所 所長）

※ジル・クレマン氏はビデオメッセージ

## ウ 記念スピーチ

第14回殿堂入り者より、殿堂入りに係る記念スピーチをいただきました。

### (ア) 中村 桂子 氏



人間は生き物で、この地球を大事にして生きていかなければならないという気持ちから生命誌という分野を作り上げ、人間がどのように生きていけばよいかを考えてきた。共感が強く、みんなで協力していくという本来の人間らしさを生かして、環境、教育、農業、土木・建築、芸術等の広い立場の方々と一緒に、地球上の生きものたちが生き生きと生きられる活動をしていきたい。

### (イ) ジル・クレマン 氏 ※ビデオメッセージ



2015年に初めて京都を訪れた時に、京都の人たちと生き物との深い関係を知ることができた。古代から来るアニミズムに始まり、今も深く根付いている世界観に非常に親近感を覚えた。様々な文化に触れた中で、日本文化に特に感動したので、京都から表彰いただくことは本当に光栄であり、みなさんに感謝したい。

## (2) 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム

「私たちは地球とともに生きる～多様性のある未来へつなぐ～」をテーマにシンポジウムを開催しました。

### ア 記念講演

第14回殿堂入り者より、自身の取組等に関する記念講演をいただきました。

### (ア) ジル・クレマン氏 ※ビデオメッセージ



この「谷の庭」は私の実験場であり、生き物を守り、理解する中で「動いている庭」という概念が生まれた。

例えば一年草は毎年姿を消し、次の年は違う場所で花を咲かせる。常に動き、旅をする。バイカルハナウドもよく移動する植物で、毎年違うところで新たな風景を作り出す。毎年景色が変わるため、新しい選択をする。生き物の動きに寄り添った庭の維持管理はこれまでにないやり方である。

すべての生き物がお互いにつながっていて、すべての生き物を尊重し、地球全体の生命・生き物を守ろうという考え方から「地球という庭」という概念も生まれた。また、人間の手が加わらず、自然や自然のエネルギーが作り出した風景の集合体を「第三風景」と呼び、これは宝物の創造とみなすこともできる。

日本で出会った庭師は、植物の特徴を活かして、テクスチャーや光を利用しながら、様々な形を作り上げていた。非常に高度で芸術的な仕事に感動した。ヨーロッパでは従来よいとされてきた水やりなどの維持管理の方法、文化的モデルを変えようとしな。そのような考え方を変えていかなければならない。

## (イ) 中村 桂子 氏



生命誌の世界観は、人間は生き物、人間は自然の一部というものであり、「生命誌絵巻」にはたくさんの思いを込めた。「生き物は多様」であり、40億年前の祖先細胞から今の生き物になっており、多様であるが共通である。生物多様性を考えるとき、「上から目線」ではなく、「中から目線」で仲間として一緒に生きていくにはどうしたらよいか、

人間の知恵を生かすことが大切。「共感力」や「想像力」といった人間としての特徴を生かすことが、多様性の中で生きるということ。

人間は古代から中世の間は生き物として「略画」的世界で生きていたが、近代社会になって科学を利用し、「密画」的になっていった。これからは略画（生き物として生きる）と密画（科学）を重ね書きしていく生き方を提案したい。

私たち生き物の中の「私」という考えを持つことができれば、地球環境や戦争、パンデミック、格差などの問題もおおらかに考えることができる。答えの出ない事態に耐える力（ネガティブ・ケイパビリティ）が今私たちに必要。

「愛ずる」は、生命誌を考える中で一番大切にしてきた言葉であり、知識ではなく、本当に生き物と向き合うことが重要。加えて科学でしっかりと考え、あらゆる生き物が生き生きと生きられる社会を作っていく責任が私たちにある。

## イ 府内高校生と殿堂入り者とのトークセッション

気候変動に関する専門家による3回の勉強会を通じて理解を深め、ビデオメッセージ作成等に取り組んだ府内高校生の中から5名が登壇し、各自で考えてきた疑問について中村氏に質問しました。

また、ジル・クレマン氏からは、事前に高校生へのビデオメッセージをいただき、会場にて放映しました。



### <パネリスト>

中村 桂子 氏（第14回殿堂入り者）  
松山 和葵 氏（私立同志社国際高等学校）  
大柴 理央 氏（私立同志社国際高等学校）  
有田 芽以 氏（私立京都文教高等学校）  
中村 美咲 氏（京都府立洛北高等学校）  
下坂 百葉 氏（京都府立洛北高等学校）

### <コーディネーター>

阿部 健一 氏（総合地球環境学研究所教授）



## ウ パネルディスカッション

「地球という庭で私たちは生きる」をテーマに中村桂子氏とジル・クレマン氏（ビデオ出演）との相互質問・回答を中心とするパネルディスカッションを行いました。



<パネリスト>

中村 桂子 氏（第14回殿堂入り者）

山極 壽一 氏（総合地球環境学研究所所長）



<コーディネーター>

マレス・エマニュエル 氏（京都産業大学准教授）



## 5 パネル展示等

JT 生命誌研究館／京都超 SDGs コンソーシアム／公益財団法人国際高等研究所／人間文化研究機構総合地球環境学研究所／京都府地球温暖化防止活動推進センター／株式会社大垣書店



## 6 当日のアーカイブ動画

<https://youtu.be/FBcUUXg30Gc>



## 7 主催・構成団体

### (1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会

京都府、京都市、京都商工会議所、環境省、人間文化研究機構総合地球環境学研究所、  
公益財団法人国際高等研究所、公益財団法人国立京都国際会館

### (2) 京都環境文化学術フォーラム

京都府、京都市、京都大学、京都府立大学、人間文化研究機構総合地球環境学研究所、  
人間文化研究機構国際日本文化研究センター